

未来の子供たちへ残したい有明海

佐賀県有明海漁業協同組合 大浦支所女性部
坂口 理恵子

1. 地域の概要

私たちが所属する佐賀県有明海漁協大浦支所は、佐賀県の最南端に位置し長崎県と隣接する太良町（たらちょう）にある。

（図1）太良町は、「月の引力が見える町」のキャッチフレーズで知られており、多良岳と有明海に囲まれた自然豊かな地域である。特産物は、おいしい太良ミカンや竹崎島から名をとった竹崎かに（ガザミ）、平成16年頃から始まった養殖カキの竹崎



図1 太良町の位置

カキが有名である。竹崎カキは大粒で焼いても身が縮みにくく、濃厚な味わいと甘みが特徴であり、旬を迎える冬場にはカキ焼き街道として県内はもとより県外や外国からもたくさんの観光客が訪れる風光明媚な町である。

2. 漁業の概要

現在大浦支所は、正組合員176名が所属しており、固定式刺網漁業や流し網漁業、投網漁業が行われる、有明海最大の漁船漁業主体の支所である。

潜水器漁業も昔から盛んであったが、平成23年を最後に、不漁のため12年連続休漁となっている。（図2，3）12年間に渡る休漁により、当時現役で頑張っていたタイラギ貝を獲っていた組合員も、潜水器漁業に携わることができない年齢となってしまった。冬場の仕事である潜水器漁業の代わりになる漁業を考えるも、他の魚をとるためには新しい漁業資材を揃える必要があるため更なる出費となり、厳しい漁業経営を強いられている現状である。そのような状況でも、漁船漁業で生計を立てることができるように、組合員は日々全力を尽くしている。



図2 潜水器漁業の様子

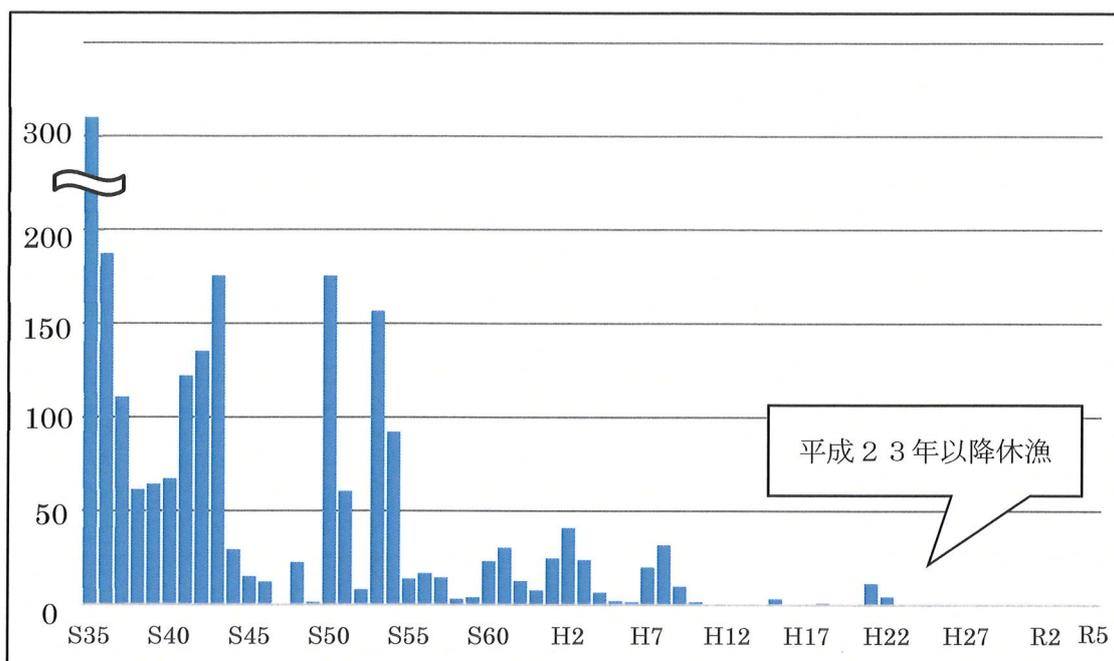


図3 タイラギ貝の水揚げ数量 (kg)

3. 女性部の組織と運営

私たち大浦支所女性部は、昭和36年に大浦漁協時代に設立され、今年で63年になる。平成19年4月に佐賀県の18漁協が合併して佐賀県有明海漁協が発足したのに伴い、現在は佐賀県有明海漁協大浦支所女性部として活動している。

大浦支所女性部は現在156名で活動しているが、約20年前の平成14年には300名の部員が在籍していた。不漁による漁業の後継者不足や低迷下、また高齢化などに伴い部員の減少があり20年前の約半分の部員数となってしまった。(図4)

現在私たち女性部は、部長1名、副部長2名、班長11名を置いて活動している。主な活動内容としては、年2回のわかしお石けんの全戸配布、講演会・講習会の開催、海岸清掃などである。(図5)

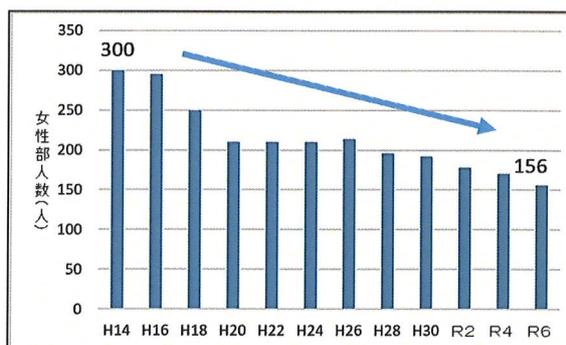


図4 女性部員数の推移



図5 女性部活動

今年度は、杵藤（きとう）地区消防本部太良分署の隊員をお呼びし、救命措置やAEDの使い方等を指導していただいた。部員の中には日頃の生活の中で、子供の場合にはどのように対処すればよいか質問する場面も見られ、家庭でも海でも命を守るために出来る事、知識や情報を得る事によっていざという時の判断を学ぼうとする姿勢が部員の皆さんに強く見受けられた。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

大浦の漁業といえば、昔から冬はタイラギ貝や赤貝（クマサルボウ）、夏には竹崎かに（ガザミ）など、その季節に応じた魚介類がたくさん獲れていた。（図6）しかし、潮の流れの変化や流速が低下し、大規模な赤潮が頻発するなど年々漁場環境が悪化し、近年では毎年の様に災害級の豪雨が起り、また、海水温の上昇が起こるなど、今まで獲れていた魚の漁獲量も減ってしまった。



図 6 大浦で獲れる海産物

更に、若者の魚食離れが進んでいる現状もある中で、私たちは魚の消費を促進する取り組みを進めている。（図7）農林水産省の調査によると、魚を食べる量が減った理由として「価格が高くなったと感じる」「調理が難しい」「生ごみ処理が面倒」などの回答があり、魚料理は手間がかかるイメージが定着している事が分かる。そこで、このイメージを払拭し、さらに魚を身近に感じてもらう事こそ、漁船漁業者の活気を取り戻す事につながるのではないかと考え、魚を身近に感じてもらうべく様々な取組を協議検討することとした。

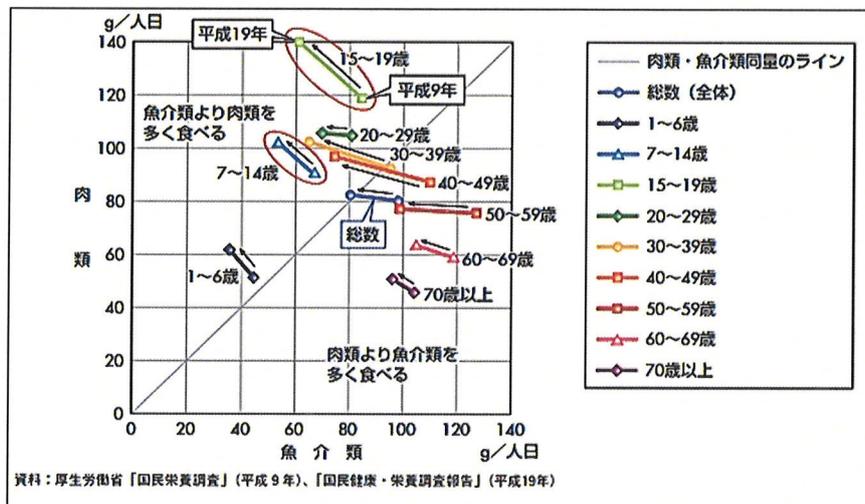


図 7 魚介類と肉類の1人1日当たり摂取量の推移 (年齢別比較)

5. 実践活動状況及び成果

大浦支所青年部が毎年開催している地元の大浦小学校5年生を対象とした出前授業に女性部も参加させてもらうこととなった。出前授業では、有明海にまつわるクイズや子供達からの質問、青年部が有明海で獲れた魚を水槽に活かし、子供たちが魚とのふれあい体験を通していろいろな漁業に興味関心をもってもらう事を目的としている。(図8)



図8 出前授業内容

私たちは、女性部で推進している環境にやさしい石けん（わかしお石けん）の事を知ってもらうため、DVDを使い子供たちに話をした。分かりやすい言葉を使い、わかしお石けんは海や川を守る環境にやさしい石けんであり、石けんの残りカスは水中の魚の餌にもなる話をした。子供たちは、「自分たちが使っている石けんが海に関係していると聞いてびっくりした」と熱心に話してくれた。

その後、子供たちに有明海にいる魚についてどれだけ知っているか尋ねてみることにした。結果、テレビ等でよく見る魚は分かったとしても、有明海では何が獲れているか分からない子供や、どんな魚がいるか知らない子供も多かった。

その後、子供たちに有明海にいる魚についてどれだけ知っているか尋ねてみることにした。結果、テレビ等でよく見る魚は分かったとしても、有明海では何が獲れているか分からない子供や、どんな魚がいるか知らない子供も多かった。

その後、有明海で獲れた魚とのふれあい体験を行った。今回の出前授業で用意したものは、活きた魚、カニ、カワハギ、サメ、トビエイ、コハダなどで、子供たちから小さい水族館のようだと言われ好評だった。最初は興味津々でも触る事は出来ずに、見ていただけの子供が多かった様に思えたが、時間が経つにつれて、水槽の中の魚を覗き込みながら「これはなんて魚？」と、名前を尋ねる声が続々と聞かれ、女性部員が魚を持ち上げ名前を教えると、子供たちも一緒になって魚に触って喜び楽しそうな声が校舎に響きわたった。

出前授業にはもう一つ目的があり、子供たちに物流の仕組み、私たちが獲っている魚などが食卓に届くまでの工程を教える事である。(図9)

私たちが獲った魚は、漁から帰ると、まず荷造りをしてトラックに積み込み、日本全国にある市場まで届けられる。そして市場でセリにかけられ、仲卸業者を経て飲食店やスーパー、魚屋で販売され最終的に家庭の食卓に並ぶ。そのことを説明する中で、おいしい魚がたくさん獲れる有明海を分かってもらい、きれいな海を残すために子供たちにも自分たちに何ができるか問いかけ、考えてもらった。



図9 物流の仕組みを説明

6. 実践活動の状況及び効果

出前授業を終えて、子供たちから感想文が届いた。(図10)「有明海にどんな魚がいるか知らなかったけど、近くで見られて名前も知ることができてとっても嬉しかった」、「最初は魚が怖かったけど、話を聞くうちに興味がでて触ったりすることができてとっても嬉しかった」、「有明海の事を知る事ができて、これからは海を大事にしようと思う」などの意見があった。

また、石けんのDVDを見ての感想もあり、「自分たちが使っている石けんが環境や海に影響していることにびっくりした。これからは、体にやさしい石けんを使おうと思います」など子供たちからの反響が大きく、私たちもとても嬉しく思った。

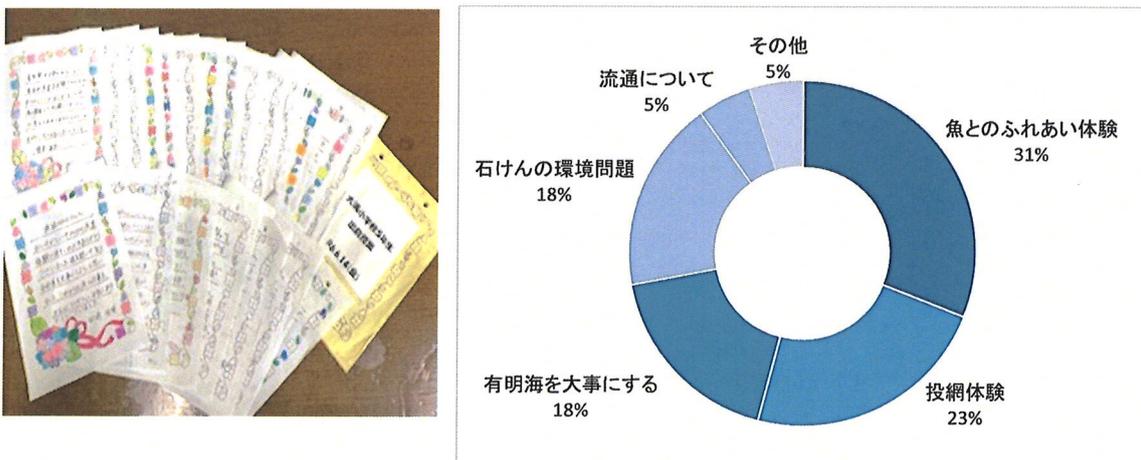


図10 子供たちからの感想

7. 今後の課題や計画と問題点

今回の出前授業を通じて、子供たちは魚に触れあうことができ、海への関心が少しでも増えたように思う。

子供たちのために私たちができることは、たくさんの魚介類が獲れる宝の海、有明海、そして自然豊かな山を残してあげること。

そのためには女性部員だけでなく、子育て世代のお母さんたちにも環境にやさしい石けんの事を知ってもらい将来子供たちが巣立っても郷土愛を忘れず太良町に帰ってきたい、家族を連れて帰郷したいと思える場所にしていきたいと思う。

最後に、現在の有明海で頻発している大規模な赤潮や、貧酸素水塊の発生など、私たちの生活排水も原因の一つになっていると思われる事から、水質改善の一策として、女性部で取り扱っている天然石けんの普及活動を更に盛り上げていき、これからも海岸清掃を続けていきたいと考えている。